

On *Billy Budd*

Melville の人生観について

岡 本 雅 夫

昭和50年 9月16日受理

はじめに

Herman Melville が1885年の暮れに、New York 税関の19年にわたる検査官の仕事から身を引いた時、彼の書斎の机の上には、*The Confidence-Man* (1857) 出版以来、書きためられた詩の原稿が積まれていたという。これらの詩の原稿を整理し、*John Marr and Other Sailors* (1888) を25部の限定版として出版し、友人に贈っている。1年後に出版された *Timoleon* と題する詩集と共に、この詩集は、彼の精神の遍歴の旅からの帰郷を示し、彼の作品にみなぎる力に満ちた創造力の象徴である海に対する追憶に満ちているとされている。Melville は、*pebble* という短い詩の中で、かつて美しく残酷であった海に優しい微笑を向け、*“傷のいえた今、私はあの無慈悲な海を賞美する”*¹⁾ と言っている。この過ぎし日の船上での生活を回想する *John Marr and Other Sailors* の中にある短いバラード *Billy in the Darbies* が、その後3年の月日を経て、彼の最後の作品 *Billy Budd* になったのである。Melville はこの *Billy Budd* を1888年の11月16日に書き始め、翌年の3月12日に再び *—Revise began March 2nd 1889—* と原稿に記し、*—End of Book / April 19th / 1891—* と記しているように、1891年4月に完成している。そしてこの年の9月28日に72年の生涯を閉じている。*Billy Budd* に対する批評家の評価は様々であるが、Eugenio Montale²⁾ は *the crowning gem of Melville's work* と述べ、*Redburn* から *Pierre*、更に *Moby Dick* へとさまよった Melville が、遂に簡潔で完璧な *Billy Budd* に至ったとしている。又 Howard P. Vincent³⁾ は、*Billy Budd* の原型である *Billy in the Darbies* は Melville の、そして人間の、永く閉じこめられた状態を示すものであったが、それを書き改め、拡大し、人生の結論として彼が遂に自由を得たことを *Billy Budd* によって示したと評している。しかし又一方では、Lawrance Thompson⁴⁾ は、Melville の常に抱いていた妄執が、人生の終局に至って、*Schopenhauerish intensity of hate* となり、“*End of Book*” の意味は、作家としての人生、芸術に対する憎悪に満ちた訣別を意味すると結ぶ評論を書いている。*Billy Budd* によって、人生の終りに臨んだ Melville が意図したものは何であったか。小論では、幾多の優れた批評家の意見を参照しながらも、*Billy Budd* の中に筆者が読み取ったものを記してみたいと思うのである。

(1)

Harrison Hayford と Merton M. Sealts Jr. が Melville の遺稿を整理し、*Billy in the Darbies* 中の老水夫 Billy が、*Billy Budd, Sailor* の主人公に変身し、物語りが完成して行く過程を明らかにしている。*Billy Budd* が本格的な物語りに発展するのは、1888年の11月頃で、Claggart の登場によって、*Billy Budd* は第二の段階に入る。そして、1888年の11月以降、翌年1889年の春にかけて、第三の段階として Vere に関して詳細な筋立てが行われている。物語りが発展するにつれて Melville の関心が移っていき、その結果、物語りの筋と、主題の強調が変化するのである。Melville が 351 頁に及ぶこの物語りの原稿を放置して、完全には完成させてはいなかった為に、結局のところ一体どこを最も強調しようとしたのかは分らず、この点について多くの批評家は取り組んできたのであるし、意見を異にしてきたのである。⁵⁾ 小論もこの物語りの進行に沿って、考察を進めていきたい。

(2)

この物語りの主人公 Billy Budd は、第1章で、*Handsome Sailor* の一人として登場する。*Handsome Sailor* とは、雄牛座の一等星アルデバランのように一際明るく輝き、仲間の尊敬を集める存在である。優れた体軀と美貌を持ち、—*Ashore he was the champion; afloat the spokesman on every suitable occasion always foremost*⁶⁾— 仲間から率直な尊敬を受けるだけの道徳的性質を持っているのである。Billy が英国海軍の *Bellipotent* 号に徴用され、Billy を失うことになった *Graveling* 船長は、*Ratcliffe* 大尉に向って、—*Lieutenant, you are going to take away the jewel of 'em, you are going to take away my peacemaker!*⁷⁾— と行って嘆き、一方艦長の Vere は若い Billy は墮落以前のアダムだと、—*such a fine specimen of the genus homo, who in the nude might have posed for a statue of young Adam before the fall.*⁸⁾— Billy をみつけたことを幸運と喜んだのである。

Billy は、私生児らしい捨て子であるが、純粋なアングロサクソン系を思わせる容貌を持ち、明らかに高貴な血統を示している21才の美青年である。蛇のような賢しさはないが、健全な人間のもつ正直な性質に見合う知性も持っている。文盲ではあったがナイチンゲールが歌うような美しい声をしていて、—*a sort of upright barbarian, much such perhaps as Adam presumably might have been ere the urbane Serpent wiggled himself into his company*⁹⁾— 正に墮落以前のアダムのような若者である。しかし彼には、ひどく興奮すると、発声が困難になる欠点がある。そしてこんな時には、彼は、まるで *the envious marplot of Eden* の干渉を受ける人間の様子を示すのである。この Billy が商船 *Rights* から英海軍の *Bellipotent* 号に強制徴用されたのは1797年の夏で、この年の4月、*Spithead* で、5月には *Nore* で英海軍で反乱が起り、特に後者は *Great Mutiny* と知られる英海軍にとっては深刻かつ重大な事件であった。Billy は *Bellipotent* 号でも、以前同様に水兵や

士官たちにも愛され、艦長の Vere は、彼を昇進させて自分の目の届くところへ置きたいと思う程であった。ところが、艦内で軍律を維持する任務—Chief of Police—を受持つ衛兵伍長の Claggart だけは別であった。Claggart は Billy の備えている徳目を理解し得る知性を持ちながら、Billy の無垢であることに—To be nothing more than innocence—対して怒りと軽蔑を抱くのである。この Claggart の持つ自然に発する邪悪さ—a depravity according to nature—としか言えない Billy に対する嫉妬と反感は、人目にはつかない彼の心の中で深まり、遂に、敵艦と遭遇し、これを追跡するも取り逃すという事件の後で、艦長 Vere に、艦内に危険人物が居りそれは Billy だという告発をするのである。艦長 Vere は、読書を愛し、自分の知性が損われないうれば、自分の保守的な物の考え方も変わらないと確信していて、政治的、社会的な新しい思想にも共鳴することない名誉を重んずる典型的な軍人である。Claggart の申し立てを直観的に偽りと見抜いて Billy に釈明の機会を与えようと、自分の立ち合いの下に Billy と Claggart を対決させる。Billy はこれまで自分の周辺で不可解なことが起つたり、経験を積んだデンマーク人の老水夫が Claggart が Billy を嫌っていると聞かされても、自分に対して悪意が向けられているとは信じていなかったので、Claggart の虚偽の告発に対して興奮の余り言葉も出なくなり、Claggart に鉄拳を振り殺してしまう。Vere はこの事態に直面し、—It is the divine judgement on Ananias! Look, struck dead by an angel of God. Yet, the angel must hang!¹⁰⁾— Billy の潔白を信じながらも上官を殴り殺したことに對して、有罪であることを決断するのである。軍法会議を召集し、Billy の無実を主張する海兵長に向って、Vere は、軍人は国王の命令によって、たとえ個人の良心に反してでも軍人として戦う以上は、戦いのもたらす軍律にそして又反乱条令に従って Billy を罰しなければ、艦内の秩序が保てないことを主張し、Billy に絞首刑を宣告する。翌朝早く Billy の刑は執行される。Billy は最後の瞬間が来る前に、“God bless Captain Vere!” と小鳥がうたうように美しい声で叫び、帆桁に吊されて登っていくのである。

(3)

以上の様にこの物語りの筋を辿っていくと、三つの点に気付くのである。第一は、Billy が商船 Rights-of-Man から軍艦 Bellipotent に移ることであり、第二は、Billy が、Claggart の偽証によって告発され、Claggart と対決して彼を殴り殺すことであり、第三は、Vere が軍法に基いて Billy に死刑の宣告を下し、Billy は Vere を祝福しながら従容と死に赴くことである。第一の点の持つ意味は、自然から文明へと Billy の世界が移ることである。Billy は、Rights-of-Man 号では、汚れを知らない自然の無垢という徳性と、赤髪の男との事件で示されるように、自然の無垢に挑戦するものに対して発揮する力とによって、その存在が船内の秩序を保ち平和をもたらす、peace-maker である。そこには文明のもたらす悪の象徴である戦争遂行のための軍法による支配はない。これと全く対照的な

のが、軍艦 *Bellipotent* 号の世界である。ここには、文明と人間の知力が醜悪に歪められた象徴である *Claggart* の存在がある。ここで注意しなければならないのは、自然の世界の秩序と、文明の世界の秩序とを対比させることによって、一方を肯定し、一方を否定するという態度を *Melville* が取っているのではないことである。この *Melville* の二つの世界の秩序に対する受容が先ず端的に示されているのは、*Billy* が強制徴用された時に、むしろ快活に、何の不平も言わないで黙従したことである。そして意味深く、しかも感動的にこの受容が示されのが、第三の点、つまり *Vere* が軍法によって *Billy* を裁き、*Billy* がこれを受け入れて *Vere* を祝福して、死に就く場面である。原始的で汚れのない *Billy* の徳性が、拒否し、断罪したのは、*Vere* の属する法の支配する社会と、この法のもたらず秩序に忠実に従う *Vere* ではなくて、*Claggart* に象徴される文明に毒され醜悪に歪んだ知力である。これが第二の点の持つ意味である。*Claggart* は、自然に発する悪の化身として描かれるが、これは自然の秩序に無知である陸の人間の悲劇的典型として描かれている。*Claggart* は、汚れのない自然の無垢を *Billy* の中に認める知力を持ちながら、その無垢を持ち得ないが故に、嫉妬し、憎悪する。優れた知性を持ちながら、自然の無垢を憎悪する depravity が、*Billy* の持つ無垢の持つ強い力に一瞬の内に葬られる致命的欠陥となっているのである。第二の点は、*Billy* の持つ無垢の力と、墮落した人間の悪との対決という点で、深い意味を持つのである。*Billy* は、*Claggart* を殴り殺した時に、両者の間には、お互いに対する悪意はなかった。*Claggart* が死んだのは残念だと言うが、*Melville* は、*Claggart* が死んだのは、*Billy* によって殺されたというよりむしろ、自然の無垢とその力、つまり自然の秩序に挑戦しようとした墮落した知力の自ら招いた破滅として描いているのである。無垢の存在を憎悪し、自分の持つ良心すら、その憎悪を正当化するためにある *Claggart* の破滅は、文明や知性に毒された、自然の秩序に対する無知のもたらずのものである。悪の存在を知らず、自然の秩序に忠実で、文明や知力に毒されない、汚れを知らない無垢が、悪に勝つ力強い場面である。この物語りは、この場面で終わっても、良かったし、実際、*Melville* の原稿を整理すると、最初はこの場面で終わっていたらしい。しかし *Melville* は更にこの物語りを拡大して更に深い意味を持たせる。この物語りが、読む者に最も感動を与え、この物語りを単なる善と悪との対決という道徳劇や寓話に終らせなかったのが、第三の点の持つ意味である。*Billy* が *Claggart* を打ち倒した時に、“アナニアスに下った神の審判だ、神の天使によって殺されたのだ”と叫んだ *Vere* は、*Billy* を即座に処刑しなければならないと決断している。悲劇の真の主人公はまさにこの *Vere* である。

In a legal view the apparent victim of the tragedy was he who had sought to victimize a man blameless; and the indisputable deed of the latter, navally regarded, constituted the most heinous of military crimes. Yet more. The essential right and wrong involved in the matter, the clearer that might be, so much the worse for

the responsibility of a loyal sea-commander inasmuch as he was not authorized to determine the matter on that primitive basis.¹¹⁾

Billy の善を認め、その潔白を信じながらも、軍法の秩序に忠実な Vere は、艦長の責任を完うしなければならない。いかに軍法が過酷であろうと、国王の命令によって軍服を着て戦っている者は、自然の法に対してでなく、国王に対して、軍法に対して忠実でなければならないとして Billy を処刑することを主張する。自然の法と、軍という社会の法の対決がここにある。しかし Melville は先に述べた様に Vere の属する世界の秩序を否定しているのではないのである。Vere が Billy に刑の宣言を告げる場面で、Vere と Billy の間でどういうやり取りがあったかを推測できるとして、それぞれ Billy と Vere について次の様に述べている。

... Not without a sort of joy indeed he(=Billy) might have appreciated the brave opinion of him implied in his Captain making such a confidant of him. Nor as to the sentence itself could he have been insensible that it was imparted to him as to one not afraid to die.¹²⁾

...The austere devotee of military duty letting himself melt back into what remains primeval in our formalized humanity may in the end have caught Billy to his heart as Abraham may have caught young Isaac on the brink of resolutely offering him up in obedience to the exacting behest.¹³⁾

Billy がむしろ或る種の喜びすら抱いて Vere の率直な意見を受け入れ、死ぬことを恐れないで刑を受け入れるとしていることに、Melville の Vere の属する世界、つまり法の支配する人間の世界の秩序に対する受容が示されており、Vere の苦悩を、アブラハムが若いイサクを神の厳しい命令に従って差し出すことにたとえて表現している点にも同じことが言えるのである。Vere は、Claggart とは全く対照的に、海の男、自然の無垢とその力を知る人間、文明や知力に毒されていない深い思慮を持つ人間であり、苦悩の内にも法の秩序に従って善を裁かざるを得ない人間の、地上における宿命の象徴として描かれている。Billy の死を恐れない自然の無垢によって示される Melville の人間の世界の秩序に対する受容は、Billy が処刑される場面で、一段と高揚した表現をとるのである。

Billy stood facing aft. At the penultimate moment, his words, his only words wholly unobstructed in the utterance were these...

“God bless Captain Vere !”

.....

The hull deliberately recovering from the periodic roll to leeward, was just regaining an even keel, when the last signal, the preconcerted dumb one, was given. At the same moment it chanced that the vaporing fleece hanging low in the east was shot-through with a soft glory as of the fleece of the Lamb of God seen in mystical

vision, and simultaneously therewith, watched by the wedged mass of upturned faces, Billy ascend, and ascending, took the full rose of the dawn¹⁴⁾

Billy は、Vere によって象徴される人間の、自然の法を、つまり神の法を冒す罪業を自らの死によって償う受難のキリストのように昇天するのである。“God bless Captain Vere!” という叫び声は、Melville の人間の世界の秩序に苦悩しながらも従はざるを得ない人間の宿命に対する高らかな受容に他ならない。ここには善と悪に対する態度、神の存在と人間の存在に対して最早いささかの迷いもないのである。第一の点から第三の点について、通してみればこの作品によって、Melville の意図したものが何であるかは、明確に浮かび上がってくる。汚れのない原始的な自然の無垢に対する絶対の信仰、文明と知力に醜悪に歪曲した人間性に対する断固とした告発、人間の世界にあって自然の秩序と法の秩序との矛盾に苦悩しながらも生きていかなければならない人間の宿命に対する受容である。

Joel Porte は、死刑の宣告を受けた者が、死刑の宣告を主として下した者よりも苦しまなかったことは、前者が、後者に、“神の祝福”を口にしたことによって示されている点についてふれ、—

Thus one meaning of Billy's benediction is made clear: it is Vere, condemned to live on in a fallen world bearing the burden of dark knowledge, who is truly in need of of a blessing. Forced to witness, and finally to take part in, the excruciatingly incomprehensible struggle between good and evil, he is constrained to accept a difficult position of moral neutrality. Vere has learned how to compromise, and it is precisely his conscious awareness of the necessity of making moral compromises that defines his tragedy.¹⁵⁾ —

墮落した世界で暗い知識の重荷を背負って生きなければならないことを神に宣告された人間こそ神の祝福が必要なのであり、善と悪の心を責めさいなむ不可解な争いに加わって、中立を保つ難しい立場に立たされ、道徳的妥協をせざるを得なかったことこそ、Vere の悲劇であるとして、人間一般の悲劇を Melville は Vere によって象徴していると述べている。この物語りの悲劇の主人公は、Billy ではなくて Vere であるとするのは、妥当である。しかしその Vere に対して神の祝福をと叫ばせたところに Melville の悲劇的な人間に対する高揚された愛情がこめられている。この物語りが、“Billy in the Darbies”の、反乱罪で処刑される前夜、過ぎし日々を回想する老水夫 Billy を基にして書かれたことは知られている。

... but aren't it all sham? A blur's in my eyes; it is dreeming that I am. ... I am sleepy and the oozy weeds about me twist.—と結ばれるバラードは、*Billy Budd* の結末に、水夫達が Billy を賞賛するものとして記されているが、この“全てはごまかしだ”“俺はもう眠い、安らかに眠らせてくれ”とあるのは明らかに Billy の“神の祝福を Vere 艦長に”と美しい声で叫んだ場にそぐわない。つまり人間の世界は不可解であり、全ては

夢のようなものだという人生の果にたどりつく諦観と、自然の無垢を保つために死を恐れず、墮落した人間の宿命に神の祝福を与える Billy によって表現する積極的な、肯定的人間観とは全くと言って良い程違っているのである。このバラードが先に書かれて、それから *Billy Budd* が、書かれたことと、このバラードと物語りの調子の違いは結びついている。Melville は、人生の終りに近づいて、Billy Budd と Vere という二人を創造し、two of great Nature's nobler order として抱擁させることによって、神と人間の和解を示したのである。R.W.B. Lewis は、F. O. Matthiessen, W.H. Auden に同調して、この作品は、老齡の静隠さからくるものであり、容認の遺言書であるとして次の様に述べている。

Billy Budd is, of course, unmistakably the product of aged serenity ; its author has unmistakably got beyond his anger or discovered the key to it ; and it would be pointless to deny that it is a testament of acceptance, as Mr Watson has said, or a “Nunc Dimitis”, as Mr Arvin proposes. It is woeful, but wisely, no longer madly. Its hero is sacrificially hanged at sea, but its author has come home, like Odysseus.

この物語りは、‘inside narrative’ とい副題があるが、反乱の首謀者 Billy が愛国心の強い Claggart という立派な軍人を卑劣にも殺したのだと、報ぜられた裏面の真相という意味と、無垢であることが危険を招き、悲劇的末路をたどるとい裏面にある真理つまり、墮落した文明や知力の生む悪は、無垢のもつ力によってみちんに碎かれる、人間の世界に悪は存在するが、善の持つ力は、法を超えて強く、かつ不滅であることの意味で、二重の inside narrative であると言えるのである。

この物語りに貫かれている Melville の信念は、the sailor is frankness, the landsman is finesse である。

純粹無垢な Billy, その美と力が平和をもたらす Billy は、Melville の脳裏に焼きついて離れない Handsome Sailor のイメージであり、Billy の無垢を信じ、苦悩し乍らも Billy を処刑する Vere も又、sailor である。Vere によって象徴される人間の苦悩を受容しながらも、Melville が人生の終りに近づいて回想したのは、自然の中で、墮落を迫る文明と隔絶した海で、生きていく自然の無垢と力に溢れた水夫であった。善と悪との対立、神と人間との対立は、Handsome Sailor のイメージによって一挙に解決されたのである。人生の不可解な謎を解こうとして苦悩し続けた Melville は、自分の故郷とも云うべき海に帰ることによってその答を遂に得たのである。

参 考 文 献

- 1) “Healed of my heart, I laud the inhuman sea” from Introduction by Howard P. Vincent in *Twentieth Century Interpretation of BILLY BUDD*
- 2) *ibid.*, “An Introduction to Billy Budd” From *The Sewanee Review* 68

- 3) *ibid.*, "Introduction"
- 4) *ibid.*, "From Melville's" Quarrel with God by L. Thompson.
- 5) *ibid.*, Introduction by Howard P. Vincent.
- 6) *Billy Budd*, *Sailor* Chap., 1 edited by Harrison Hayford and Merton M. Sealts.
- 7) *ibid.*, Chap., 1
- 8) *ibid.*, Chap., 18
- 9) *ibid.*, Chap., 1
- 10) *ibid.*, Chap., 19
- 11) *ibid.*, Chap., 21
- 12) *ibid.*, Chap., 22
- 13) *ibid.*, Chap., 22
- 14) *ibid.*, Chap., 25
- 15) The Romance in America by Joel Porte p. 188
- 16) The American Adam by R.W.B. Lewis p. 147

Résumé

On *Billy Budd*

M. OKAMOTO

There are many critical views on *Billy Budd*, but even now this last work of Melville's cannot be said to have an established estimation, compared with other works, especially with *Moby-Dick*. So the writer's intention is to follow this work, noting where the important emphasis is put by the author, and to find what the author meant to tell the world, in his last days, on the true aspect of human life.